新学年を迎えるにあたって

－立派なノートをつくろう－

開倫塾
塾長　林明夫

『　手で書くこと

あなたが注意深く作り上げたものだけに、書物よりも貴重なのは、あなた自身の書いたものである。趣味のことに戻るならば、趣味をもって－きちんとした書体、平均した余白、気に入れば、赤インキで、すっきりとした見出しをつけて－ノートを作りたまえ。

書く仕事には、ノート・ブックを使うか、ルーズ・リーフなり、カードを用いる。

カリキュラムの異なった科目に、生徒は各先生の指示に従って、授業用のノート・ブックを用いる。一言だけ言っておこう。講義の単なる筆記で終ってはならない。例えば歴史のノートは事実の重要なものだけを書き込むべきで、またその事実は、あなたの考え出した、授業全部を一目でありありと思い出させるような順序に従って配列すべきである。

しかし授業用のノートの他に、好きなことを書き込む、1、2 冊の個人用ノートも持つのがいい。それは、音楽のような美しさをもち、魅惑される美しい詩を書いてもよいだろう。注意深く筆写し、記憶の中に埋まり込むまで、何度も読み返して楽しみたまえ。しかしまた、集まりで使えるちょっとした独白を集めたり、ユーモアのある表現や、心を打たれた思想をノートしておくこともいいだろう。

好みの筆写に使われた時間は時間の無駄だ、という人もいるだろう。あなたの自負する最も完全なノートによる抜粋よりも、はるかに上等な選文集があると人はいうだろう。

そんなことは考えないでおいていい。あなた以外の人にとっては、本屋で売られているこれらの本は、あなたの抜粋集よりも好ましいものだろう。しかしあなたにとっては、まさにそれがあなたのものであるという理由で、あなたの抜粋集に匹敵するものは他にはないだろう。それに、大部分の人にとって、筆写以上に精読するのによい方法はないのだ。まずペンをとる前に、あなたの選文集に入れるだけの価値があるかどうかを確かめるためには、本文を何度も読んだことだろう。それからあなたの作業を最少のものに切りつめるためには、興味を引く展開がどこで始まり、どこで終るかを決めるようにするのに、本文にもう一度戻らなければならず、それは、思考の分析のすばらしい訓練になるのだ。最後に、書くことによって、あまり見慣れない語に立止まり、刺激的な主張を吟味し、示されたイメージに基づいて夢想するだろう。外からあなたを見ている人は、あなたが、筆写する仕事しかしていないと思うだろうが、自分のしていることをよく観察すれば、あなたの手仕事には深い文学的研究が重なり、書き、考える技術へのすばらしい入門になることをあなたは確認するだろう。

何度も読むこと、暗誦すること、さらにいいのは、ゆっくりと、版画家の慎重さで書くこと、立派なノートに、美しい余白をとって文字を書くこと、充実した、均衡のとれた美しい文例を筆

写すること、これこそ、思想のための巣を作る優れた、柔軟体操である。
（アラン『教育論』 1932）

生まれつきの才能や、恵まれた環境で自分の蔵書のうちに避難の場を見出す人達がいる。自分の本について「これは人生の旅に見出した最良の糧食であり、これが不足していると言わねばならぬ教養人を見ると気の毒でならなくなる」と言った、《書庫》にいるモンテーニュのように。さらに強烈なのは『法の精神』の著者の場合で、自画像を書いて次のように付記している。

研究は私にとって、人生の不快に対する最良の薬であった。どんな苦しみでも、1 時間の読書がとり除いてくれた。
（モンテスキュー『ノート』 1741 ）

多分、モンテスキューは大げさに言っているのであろう。1 時間の読書で真の苦しみから解放されるとするならば、彼は人間ばなれしているように思われるだろう。他方、この思想の世界に生きるインテリに効く薬が、すべての人にとって同じように有効な万能薬となり得ると思ってはならない。人生が苦しい時には、気力を失わせる考えを追いはらう、気晴らしを見出すことが出来なければならぬ。しかし真の教養人にとっては、読書がそれにあたる場合が多い。』

*「公民の倫理」（入門・哲学講義） P・フルキエ著 久重忠夫訳・筑摩書房刊（1977 年 9 月 25 日）92 ～ 93 ページ。

1．長い引用になりましたが、本書は、フランスのリセで使われている古典的名著「哲学講義」の著者、ポール・フルキエが中学生（リセ、コレージュの前期課程の生徒）のために書いた倫理・公民の教科書『今日と明日ー反省と展望』の翻訳からの引用であります。

2．少し読みにくい文章ですが、2 ～ 3 回くりかえして読んでいただければ開倫塾の塾生の皆様にも著者が何が言いたいのかおわかりになると信じます。

3．新学年を迎えるにあたり、新しい学校や学年で何を学ぶかが決まり、テキストも決まったところで、是非この文をヒントに、ノートの作り方にも工夫をこらしていただきたく希望します。

4．ゴールデン・ウィーク終了までに 1 科目でもいいから、学校の教科書を 1 年分（1 冊）予習してしまおう。

5．新学年がはじまり、学校からは教科書が配布されたことと思います。授業がはじまるまで教科書を開かないのでは余りにも消極的すぎます。どんどん予習をはじめてみましょう。

（1）英語はノートの左ページに英語、右ページにその日本語訳を書いてみましょう。わからない単語は辞書で調べること当然です。英語好きの人は、ゴールデン・ウィークが終るまでに、最後の

課までこのやり方で予習し終えて下さい。（中学 1 年生から高校 3 年生までこのやり方が最も力のつく予習の方法です。）

（2）算数・数学においては遠慮は要りません。教科書をどんどんすすんで下さい。新高 1 生はゴールデン・ウィーク終了までに、とにかく歯をくいしばってガイドを使ってでも O.K ですから教科書を終して下さい。高校時代がバラ色になります。

（3）国語は教科書 1 冊横になりながらでもいいですから、小説を読むつもりで読んでしまうことです。通知票で最高の評価がとりたかったら、辞書を使ってゴールデン・ウィークの終りまでに意味調べをすればよいだけです。

（4）理科・社会の 2 科目は、サブノートづくりに限ります。私は、中学 3 年のとき、ゴールデン・ウィークが終るまでに公民のサブノートを作り終え、社会が大好きになりました。皆さんもおためし下さい。

6．ものごとをやるときは、何事も積極的に取り組むことが大事です。どんどん予習をし、自分の力で自分の得意科目を一つでも作り上げて下さい。1 科目でもよくできる科目があると、それだけで学校生活は楽しくなるものです。